

追慕の辞

本日、筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、解剖実習のために御献体くださいました方々に、医学群学生を代表して謹んで追悼の言葉を捧げます。

私たちは、御献体くださいました白菊会会員の皆様、並びにご遺族の方々のご厚意により、今年の5月中旬から6週間の解剖実習を行うことができました。

6週間の解剖実習が終了して、約3ヶ月近くがたちました。そんな今振り返ると、実習中の6週間は、医学生だからこそ特別に許される、人体解剖という行為に大きな期待を抱きつつも、非常に重い責任感や、慣れない作業への緊張感、学ぶ内容の多さに対する重圧に、押しつぶされそうな日々でした。さらに、御献体いただいた故人とその御家族の方々に思いをはせ、また実習を共にする班員や先生方に対しても感謝の気持ちを持ち、今までに経験したことがないほどたくさんの思いを抱き日々を過ごしていました。

解剖実習期間中、常に人の死について深く考えさせられていました。中間諮問のとき、剖出不十分な箇所があり、悔しい思いをした経験を通して、ご献体くださった故人、そしてそのご家族の御意思を決して無駄にはしない、という姿勢の大切さに改めて気づかされました。人の意思は、たとえその人が亡くなってしまっても後世に残り続け、私たちはその恩恵を受けて生きているのだと、私たちにできることは、そのことに強い感謝を抱き、今を全力で生きることなのだと考えました。

解剖実習を終えて、私は今まで学習した医学を、頭の中で、概念的にしか捉えられていなかったことに気付きました。今回、実際におひとりの御献体に向き合って、自分の手で解剖をすることで、頭の中の知識と実感が結びつき、目の前で学んでいる医学知識を、自分自身の身体に投影することができるようになりました。ひとつの臓器を学ぶとしても、それだけを取り上げるのではなく、身体全体の中での位置、周囲の臓器とのつながり、神経や血管との関係などを、直接見ることでできたため、今までの座学とは違った、非常にリアルで印象的な学びを得ることができました。また、解剖を進める中で、人の身体は教科書に書かれている通りではなく、それぞれ個性があるのだと改めて実感させられました。医師は、患者さんの身体の一部だけをみて、治療を行うことはできないと考えています。一人ひとりの個性を把握し、その方の心にも、体にも、周囲を取り巻く環境にも向き合う必要があります。今回の実習での学びは、私たちが今後そんな意思を目指すうえで非常に大切なものであると思います。

最後になりますが、御献体くださいました皆様のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、肉親の死に際し、悲しみや苦しみの中、御献体にご理解くださり、ご協力いただいたご遺族の皆様の計り知れないご厚意に改めて感謝申し上げ、追慕の辞とさせていただきます。

令和5年 10月4日

医学群 医学類 二年 結城舞